

もう一人の君に

onawowo

／ 1

薄暗い夜明け。

日の光が地面にまで到達しているのか疑いたくなるほどの酷く冷めた光だった。

薄っすらと目を開くことを確認できることから、まだ東雲塔夜しのめとうやの意識はこの場所にあると判断することができるんだらう。いつになく冷たい空をぼんやりと漂っていく雲を見つめていると、いつ意識が跳んでもおかしくないこの状況を冷静に直視できると思っていたのに。

「うんしょっと……」

ビチャリ。

グチャリ。

力を入れて、軽く頭を起こそうとしただけでこれだ。塔夜はもう殆ど痛みは感じなくなってしまっていた。

場所は交差点。辺り一面には、真っ赤な血潮が散乱していた。

「う、嘘でしょ？」

歩道に片膝をついて目の前の光景を信じられないとでも言うような目で見つめながら、遥華はそう呟いた。遥華の目の前にいる塔夜はぐったりと仰向けに倒れ、頭部からは真っ白な雪を更に印象付けさせるような、鮮血の赤が流れ出している。

「ちょっと、ねえ、起きてよっ！　なんでこんなことっ！」

すぐさま駆け寄ると、胸を揺すり、必死に塔夜の取った行動を責める遥華。

擦り剥いた膝から流れ落ちる血傷には目もくれず、一目散に塔夜の元へと向かっていた。

「え？　いや、ちょっと目の前に居たお前を突き飛ばしたくなっただけ……だよ？」

必死に辛い表情を隠し明るく努める。笑いながら何ともなしに言っただけの塔夜だった。

(やばい、僕、死ぬのかな)

とっさ
咄嗟に塔夜はそんなことを思い、自分の死を悟った。

事故多発地帯。そこで塔夜は飛び出してきた車に撥ねられたのだ。いや、撥ねられるはずだった人を庇ったと言い換えてもいいのかもしれない。頭蓋骨、あるいは首の骨折が考えられ、素人目から見ても助かる見込みは絶望的であると言えた。

「何勝手なことしてくれちゃってんのよ、全く」

暫くして救急隊が到着し、塔夜の元へと駆け寄っていた。容態、安否を確認するやいなや、専門用語をいくつか口にし、そのまま少年を救助用のベットへと移していた。救急車へと運ばれていく少年。その少年へと怒りに満ち溢れた視線を送るのは、彼を慕っていた幼馴染はるかの遥華だった。

「全然かっこよくなんかないんだから！　私を庇ったって思ってるのかもしれないけど、全然かっこよくなんかないんだから！」

野次馬が集まりつつある事故現場で、そう大きく声を上げて泣き叫ぶ遥華の声。しかし、その

声は今の彼には届かなかった。

溢れんばかりの涙を目に溜めて、塔夜が病院へと連れて行かれるその様を目に刻み込んでいた。

——それは雪が柔らかく舞い落ちる十二月のある日に起こった悲しい出来事だった。

／2

——ここは、どこだろう。

ぐるりと辺りを見回してみるが、一面暗闇に染められており、何一つ可視することができない。

どこかこの世ではないどこかへ来てしまったのが如く、酷くこの空間は冷め切っていた。

(そうか、僕はあの時死んじゃったのか)

意識の中で、塔夜はそう確信した。しかし、どうしてだろう、塔夜は今の自分をそれほど悲観していなかった。

(あいつの命が助かったんだ、僕の命は十分人の為になったじゃあないか)

そんなことを考えながら、これから自分はどうなるのか？ という当然の疑問が頭に浮かぶ。

(天国なのか？ 地獄なのか？ でも、できるなら天国がいいな)

この先どっちに行くことになるのだろう。いや、それ以前に成仏しているのだろうか？ 天国、地獄のどちらに行くにしても、そこに行けるまでの過程を終えているのだろうか？

(んー、わからないな。そこは、家族に任せることになるだろう。はあ、何かとっても短い一生だったな。何の悪戯か、交通事故で死んじゃうって、どんだけ不幸なんだよ)

ため息交じりにそんな愚痴をこぼしていた。

(ん？ 何これ？ お迎えが来たの？)

暗闇の中、一筋の光が塔夜の元へとゆっくりとやってくる。その光は塔夜の右拳ほどの大きさで、丁度塔夜の胸元で止まったように見えた。

ずっとその光に触れる、と同時に塔夜の潜在意識に直接語りかけてくる彼女の声。

「塔夜っ！ 塔夜っ！ ねえ、起きてよっ！ 塔夜っ！」

(遥華か。もう、そんなに強く叩くなよ。綺麗な遺体が傷ついちゃうだろ)

その光を通して、塔夜は元々存在していた世界の様子を確認できた。

泣きじゃくる彼女の後ろには、塔夜の母さん、父さん、そして妹の芽衣が固唾を呑んで塔夜の容態を見守っている。

隣に居た塔夜の担当医師であろう人が遥華の肩に手を乗せ、何言かを述べているが、全然聞き耳を持っていない様子だった。

「いやだっ！ そんなの嫌だっ！ ふざけないでよっ！ なんで、なんで勝手に逝っちゃうのよ」

ドンドンと塔夜の胸板を叩く遥華。

(おい、傷み感じないけど、それぐらいにしとけよ。死んじゃった人が蘇るなんてことはありえないんだからさ)

囁くように、塔夜は遥華にそう問いかけていた。

本当にあっけない一生だったなあ、と我ながら清々しかった。

——その時だった。

「一つ、汝に問いたいことがある」

先ほどまでの視界は影を潜め、今度は誰とも形容しがたい酷くやつれた声が塔夜の心の中に直接語りかけてきた。

(え？ 何？ 光が……言葉を喋った？)

この暗黒の世界に来て初めて、塔夜は自分以外の人が喋る声をキャッチできた嬉しさをかみ締めていた。

「お主は、いつまでもこの場所にいるのと、もう一度あの世界に戻る、どちらがよい？」

唐突な質問。

塔夜はしていないはずの息を呑んだ気がした。

「え？ それってつまりもう一回生き返ることができるってこと？」

咄嗟、声を感じた。

「そう。別にお主に何かをしようとするわけではないが。唯一つ、お願いしたいことがあってな」

「お願い？」

「そうだ。お主はまだ若くて健康そのもの。元気が有り余るほどのやつでなくてはこなせない仕事をお願いしたいと思っているのだ」

蘇生に加え、突飛過ぎる提案だった。

塔夜は絶対に何かあると思った。

「んー、もし断わったら？」

「いつまでもここにいる羽目になるだろうな。おぬしは自ら死を選んだのだ、当然の報いである」

「え？ ちょっと待ってよ！ 塔夜は遥華を助けたんだぞ？ それなのに無駄な死って」

確かに、自ら死を選んだと取られるかもしれないが、他人を庇ったというきちんとした理由があるのだ。

「一つ言っておくと、お主が遥華と呼んでいる人物は、本来ならばあの時、掠り傷一つつかずに助かるはずだったのだ」

「え？」

「路面が丁度良くスリップし、あの子、そしてドライバー共に無傷で終わるはずだったにも関わらずお主が余計なことをしたからに、事がややこしくなってしまったのだ」

つまり、どういうことかと言いますと？

「塔夜が死ぬことは想定範囲外？ だったと言うことなの？」

「そうだ」

キッパリと言いきられてしまった。

「ちょ、ちょっと待ってよ、それじゃあなに、あの時変に正義感を発揮しなければ僕は生きていて、遥華とドライバーは無傷で助かっていたってこと？」

「そうだ」

「な、なあってこったい」

つまり、塔夜の死は無駄だったということになる。

「まあ、そんなに落ち込むな。お前のその勇気は運命をも変える力を持っているということを、この私に証明させてくれたではないか」

慰めの言葉を言ってくれるのは嬉しいけれど、無駄死にだって聞かされてショックを受けないやつなどいないはず。

「で、でも、仕方ないよね？ 無駄だったのかもしれないけど、確かに自分のした行動だし。悔いはないよ？」

暫くの思案の後、そう口にして自らの行動にけじめを付けていた。

「ほう」

「でも、もう一度生き返られるチャンスがあるのなら、その提案を聞かせて欲しいな」

一抹の望みに再起を賭け、塔夜はそう述べていた。

「そうか、潔いな。やる気になったか。それでは、今からお主にその仕事内容を述べるのだが、最後にもう一度聞く。この内容を聞いたら最後、後戻りはできない、リタイヤもできない。つまり、この仕事を完遂しなくてはお前自身、本当の解放は望めない。あ、一つ言い忘れたが、リタイヤは速攻地獄逝きだから覚悟するように。それでもやるか？」

ここに来て、散々な制約をつけてきたが、今更どうでもよかった。

「いいから言ってよ。その仕事内容ってやつをさ。どうせここにいつまでもいたって暇すぎて干からびちゃうもん」

変に脅しを入れられたところで、塔夜の決意は変わらなかった。

いや、塔夜以外の人だったとしても、この異空間から抜け出す事ができ、且つ蘇生が約束されるのだから誰しもが首を縦に振るんじゃないだろうか。

「わかった。それでは覚悟を決めたということで、仕事内容を述べることにする。くれぐれも後悔することないようにな、塔夜」

「え？」

どうして僕の名前を？ そう言おうと思ったが、時既に遅し。

光は暗闇に溶け込むように消え入り、塔夜の視界は完全に暗闇に支配されていた。

／ 1

「――はぁ」

机に突っ伏し、塔夜はため息をついていた。またあの時の夢を見ていたらしい。

ふと教室の窓から外を眺めながら、平和に溢れた今の近況はとても退屈で、この世から隔絶されたあの瞬間が嘘のように感じられてしまう。

しかし、一度もあの時のことを忘れたことはなかったし、時々こうしてあの時の出来事が夢に出てくるのだ。まるで忘れさせないとも言えるような戒めを向けているのかもしれないけれど、それならばさっさとその時を迎えさせろと言いたかった。

あの時――言葉を喋る一筋の光と契約を交わして、あの世からの階段を駆け下りる事ができたにも関わらず、何時になっても『その時』は訪れなかった。

やっぱり、あれはただの幻だったのだろうか？ だとしたら儲け物だが、流石にそれはないか。

――キーン、コーン、カーン、コーン。

退屈な授業が終わりを迎えた。

視線を教卓へと向け、起立、礼。

教師への挨拶を終えて、いつしか教室は昼休みの色を呈していた。

「おい、塔夜。今日はどうするんだ？ 学食行くのか？ それとも弁当持ってきてるのか？」

背後から塔夜の名前を呼ぶ陽気な声。その声に反応し上半身だけ振り返ると、頬杖をついて塔夜を見つめる少年がいた。

みきもとしんや
三木元新谷それがこいつの名前だった。部活動は野球部に所属している。性格は明るく、それなりのルックスを持ち、人当たりも良いのだが、なかなかどうして成績は中の下。どうしてこんなやつと仲がいいのかと言うと――まあ長くなるからやめておこう。

「ああ、学食に行こうと思ってるよ。お前も、一緒に来るだろ？」

そう言って席を立つ。

「あれ？ 遥華ちゃんは待ってないのかよ？」

「あいつはもう先に行ってるってさ。あいつのクラス、四時限目の授業は体育らしいから、早めに授業が終わるんだと」

「かー、俺達の席を確保してくれているってことか。嬉しいねえ」

ポンポンと腹部を摩る新谷を隣にし、塔夜達は教室を出た。

「それにしても早いよなー。入院期間一月だって言うじゃあないか。奇跡的な回復力、さすが塔夜」

食堂に向かう途中、新谷がそんなことを言ってきた。

「まだ言うか。まったく、これで何回目だよ。まあ、あれのおかげでインターハイの予選に出れな

くなくて、夏休み全部持って行かれたけどな」

塔夜は今年、あの幼かった頃に遭った出来事と同じように交通事故に遭っていたのだった。右腕が骨折して、左足の靭帯を損傷するという大怪我を負ってしまったのだが、奇跡的な回復力で当初半年はかかるはずの怪我を一ヶ月で退院まで漕ぎ着けてしまったのだ。

医師からは、奇跡だ、信じられない、ありえないと言った何とも嬉しくない言葉で回復を祝福してくれた。もちろん、家族みんなからの暖かい言葉はとても嬉しかったけれど、たぶん一番嬉しかったのは、『あいつ』だっただろう。

「でも、まあ、生きてるだけマシだろ？ 遥華ちゃんから事故の話聞いた時、マジでお前の死を覚悟しちゃったもん」

深刻な表情であの時のことをこと細かく語ってくる。

「いや一本当に助かってよかった。遥華ちゃん物凄く心配してたんだぞ？」

ふとあの時のことを思い出す。塔夜がこの世で目を醒ました時、塔夜の右手には彼女の両手が握り締められていた。その時の喜びようって言ったらもう、玩具を与えられた子供のようなことを覚えている。

「いやーやっぱり、愛だね！ LOVEだね！ ったく、すかしてんじゃあねえぞ、こいつう！」

からかうように新谷は塔夜の脇を小突く。

「うっせーな。あ、あの奥にいるの、遥華と明日香か？」

食堂までの一本道を進んでいた。半分話に集中しながら、残りの半分で席を探し一丁度、視線を学食内の中ほどで彷徨わせていた時だった。

視線は彼女達を捉えていた。

「うん、そうだわ。隣は――」

遥華の隣には、明日香が先客として座っていた。塔夜達に気が付くと、軽く手を上げて反応してくれる。

「あ、やっぱり、そうだ。おーい」

新谷と一緒に手を振りながら、混雑した学食内を闊歩し、彼女達が占拠していたテーブルへ悠々と到着した。

「あんた等、来るのいつも遅いわよね。そんなんじゃあいつまで経っても、学食で飯にありつけないわよ？」

五人掛けの椅子。空いてる二人分の席にドスッと腰を下ろすや否や、明日香が塔夜達二人を見てそう呆れたような声を上げた。彼女の名前は、東海林明日香。ショートに下ろし、褐色のかかった艶のある髪の毛。そして、クリッとしたつぶらな瞳が特徴的な明るく元気な高校二年生である。三組のクラス委員をやっており、そのせいか、塔夜達にいつも憎まれ口を叩いてくる。

「うるせえな。お前はそうやってバクバク食ってばかりいるから太るんだろ？ 少しは自重しろよな？」

即答する新谷だった。当然と言うべきか、不可避と言うべきか、彼らにとって何時ものコミュニケーションの一つに過ぎないのだろうけれど、良くもまあ飽きないものだ。

「何ですってっ！ 新谷、あんた後で覚えておきなさいよっ！」

彼等なりの愛情表現。よし、放っておくことにしよう。

「よっ。今朝ぶり！ 何かあったか？」

隣。二人の痴話ゲンカを見つめる遥華にそう言って、塔夜達も彼等同様に始めようとする。

目の前の彼女、^{はやしばらはるか}林原遥華は、塔夜の彼女だ。

「ううん、特にはないけど……水泳の授業の後って、髪が濡れてるから少し気分はブルーになるかな？」

遥華はそう言って、黒髪をすく。

「まあ、仕方ないんじゃないの？ 授業だし、割り切んないと」

「はあ……で、塔夜は？ 何かあった？」

鸚鵡返しに聞いてくる。

「いんや、何にも」

窓の外ばかり見てたしな。

「はあ。つまらない男だわ」

あの幼かった時、あんなに泣きじゃくっていた子だったなんて思えるはずがないような、ぞんざいな対応だった。

でも、こういうクールな一面は嫌いじゃあないとか尝试してみる。

「可愛くねえやつ」

そう言って席を立った。反対側で明日香と話をしている新谷に声をかけ、昼食を買いに行こうとする。

「おう、じゃあ行くか。明日香、じゃあちょっくら行ってくるわ」

新谷も明日香にそう言って、塔夜の後ろに付いて来た。

「相変わらずだな」

「毎日やってることを続けてるだけだ。なに、そんなに劇的に変わるようなことあるかよ」

見ての通り、新谷と明日香は付き合っている。明日香は書道部に所属しており、何だかんだの紆余曲折があり今は意気投合しいろいろと騒ぎ立てるほどの仲になっていた。

「お前ら、相変わらず仲が良いんだか悪いんだかわからないよ。話してる内容聞いたことあったけど、誰とでも交わすような挨拶レベルじゃないか」

少し胸にチクリと来る言葉だった。

「いつものことなんだから、別にいいだろ」

言って、食券を買う塔夜だった。

そこまで遥華との仲を客観的にみたことがなかったせいか、新谷に言われてしまうとそうなのかと思ってしまう。

「会話した分だけ仲が良くなるんだったら、そこいら中で喚いてる生徒が現れるだろ」

想像して見ると、かなり嫌だ。

一方的にガミガミ言う側になるかそれを聞かされる側になるか。もしくはお互いにガミガミ言うか……。

「それに、定期的に喉のメンテナンスが必要になるな」

「何を想像して言ってるんだよ、塔夜」

呆れられたのか、そんなことを新谷に言われてしまった。

「ラーメンセットはいつも元気だな」

「買う方は元気じゃないってことか？」

どう言う意味かと訊かれても言い返す自信がなかった塔夜だった。

「それは訊かない約束でしょ？」

食券を片手、昼食コーナーに並ぶ塔夜と新谷だった。

「あ、ラーメンセットで」

塔夜達の順番が回ってきた。

買った食券をお盆に載せ、調理を担当しているおばちゃんに見せる。

「あいよ。君も同じのだね？」

後ろにいる新谷に目配せすると、同じように彼も食券を見せる。

「大盛でヨロシク！」

新谷は親指をぐっと上げて、白い歯をチラリと見せていた。

「あいよ」

顔馴染みになり、いつもサービスをしてくれるおばちゃん。

そのお心遣いはとても嬉しいのだが、特定の学生を^{ひいき}贖するような行為を学校側は許可していないだろう。

しかしながら、発育盛んな現役バリバリの高校生にとって、昼食の糧は今後の授業、部活、睡眠、その他諸々の雑務に支障をきたすほどの重大な意味を持っている。学食のおばちゃん達はもしかしたらそれを理解してくれているんじゃないだろうか？

「さて」

大盛になった^{どんぶり}丼とミニラーメンをおぼんに乗せ、彼女達の待つ席へと向かうことにした。

ラーメンから立ち上る香りが鼻腔をつく。いい香りだった。

「ふーん、変わらずラーメンセットか」

席へと向かうと、明日香が塔夜と新谷のおぼんを見るや口を出してきた。

「いつもの通りで何が悪い」

新谷が明日香に反論するように言った。

「別に悪くはないけれど、よく飽きもせずに頼むなあーと思って」

「わたしは何頼もうが構わないけれどね」

割って入った遥華だった。

言って、遥華はご飯を口へと運ぶ。

もぐもぐと美味しそうに食べていた。

遥華が頼んだのは野菜炒めだった。生姜の香ばしい香りが漂ってくる。

「んー、野菜炒め美味しそうね。私も頼めば良かったわ」

明日香は隣でご飯をほおぼる遥華を見て、そんなことを言った。

「明日頼めばいいじゃないか」

「食い意地張るとまた太るぞ？ 明日香」

塔夜と新谷にそう言われ、

「ちょっと、失礼しちゃうわっ。私これでも痩せてる方なのよっ」

ドンッ、と手に持っていた親子丼を置いて、鼻息を荒くした明日香だった。

「何もそんなにムキにならなくても……」

塔夜が宥めようとしたが、それを制止して明日香は言った。

「見てよ、ほらっ」

もぞもぞと懐から何かを取り出そうとする。

そして数秒後、取り出された何かに指を指していた。

「これ、何かわかる？」

新谷に訊いた明日香だった。

「これは――カロリー表？」

「ええ、そうよ」

はいっ、と明日香からカロリー表を渡された新谷だった。

それはどう言う意味だろう。

「それ私毎日持ち歩いてるのよ？ 知ってた？」

視線を新谷とは合わせず、腕組をして顔をしかめる。

そのムキになる様が、明日香のなんとも言えない魅力になっていたのかもしれないが、新谷はどう思っているのだろう。

「あはは、悪い。今知った」

新谷の攻撃と明日香の性格とのつり合いは、こんなところだった。

さて、そんな会話はさておき。

「いつも美味しそうに食べるよな、遥華は」

遥華のおぼんを覗かせて頂く。

野菜炒めとご飯と味噌汁。それに牛乳とお新香が付いていた。

「わたし、このメニュー気に入ってるんだ。塔夜も頼んでみるといいんじゃないかな」

ほんわかと言う遥華だった。彼女の場合、食事中は性格が変わっていた。

「ああ、次回頼んでみるさ」

言って、箸でちょいちょいとラーメンをつつき始めた塔夜だった。

そんな風に、日常は続いていく。

それはもう既に忘れかけようとしていた約束だった。

今日もまた何事もなかったように終わっていくのだろうか。

「あれ？ 食べないの？」

「えっ？ ああ、ちょっと考え事しててさ」

止まっていた箸を遥華に指摘されていた。

「考え事？ どんな？」

瞬間、視線が交錯する。

遥華が興味を示した時に行う癖だ。

「んー、なんて言うんだろ。ちょっと現実逃避したくなかったって言うかなんと言うか」

それは、ちょいとばかし伝え難いものだった。

「何それ、彼女のわたしに言えないことなの？」

そんな風に言われてしまうと、言うしかなかった。

「――変な夢を視るんだ」

「夢？」

遥華が繰り返していた。

「うん、小さい頃の夢。ほら、俺――交通事故に遭っただろ？」

その時、ぼろっと何かを零した遥華だった。

そして、彼女の中で瞬時にそれは判断されたらしい。

「その話――わたし聞きたくない」

彼女の視線に触れていた。遥華は不機嫌そうに言った。

「言っておいて難けど、あれから何年時が経つんだろうな」

遠い昔を振り返るように言った塔夜だった。

「――まあ、一応……わたしは忘れてないけどね。そのことは」

「そのこと？ 何、遥華が俺のために泣きじゃくってくれてたことかよ」

ぼきり。

転瞬、遥華の持っていた箸が折れていた。

「あはは……冗談冗談」

笑って誤魔化した塔夜だった。

乾いた笑顔で返すと、少しだけ恥ずかしそうに言った遥華だった。

「過去のこと、あんまり思い出したくないんだ」

閑話休題。

この話はここで終わりだった。

次に進もう。

「しかし、話すこと、ないよなー」

しかしながら、そんなに話題はないわけで。

「退屈な日常ね」

言って、むしゃむしゃと草食動物さながらに野菜炒めを貪っていた遥華だった。

日がな一日黒板へと視線を向けて、適当に指された問題をこなす。

毎日そんな日々。

「はあ」

刺激に飢えてる？ なんて言われそうだけれど、そんなことではなかった。

いつ来るかわからない『その時』に対しての困惑。

やってくるのは――いつも忘れた頃だった。



部活終了後。

——一緒に帰らない？

携帯電話を確認すると、遥華からメールが着ていた。

——ああ、一緒に帰ろう。

そう一言一句間違えず正確に返信する。

それで今日も何事もなく終わるのだろうか。

遥華と帰り道は同じ方面だった。

「今日も部活、おつかれーっ」

遥華はそう言って思いっきり背伸びをしていた。

右腕を思いっきり伸ばし、左腕を頭の後ろに持っていく。

「ああ、お疲れ」

それは勿論、遥華に言ったものであり塔夜自身に言ったものでもあった。

橙色に染まった空の下、塔夜と遥華は歩いていた。

「部活って言うより、なんだか日々の作業って感じだけどね」

体操服の入った荷物を背負ったまま、彼女は言う。

「毎日やってるとそう言いたくもなるよな。俺も同じことの繰り返しって感じだもんな」

「って言うか、そっちは直ぐに終わって良いわよね」

縁石に乗って、そうぶしつけに言う遥華だった。

「よく言われるナンバーじゃないか。でも、息止めるの苦しいんだぞ？ やってみ」

塔夜は少し不機嫌そうに言う。

でも、こんな会話は慣れっこだった。

「別に本気で言ってないわ。ただ、ちょっと言ってみただけって言うか、なんていうか」

言って、口を尖らせた遥華だった。

そんな感じらしい。

「んー……塔夜って、わたしのことどう思ってる？」

「何だって？」

遥華の突飛な発言に訊き返した塔夜だった。

「だから……わたしのこと、どう思ってるのかなーってこと」

ぶしつけ×2に言う遥華だった。

「どう思ってるって……そうだな、可愛い彼女だって思ってるよ」

毎日の証明。

その証は大切にしないといけなかった。

「そっか、良かった」

彼女との会話はこんな感じだった。

距離感はまあそれなりに。

「それじゃあ、逆に俺のことはどう思ってるんだ？」

「同じく、わたしも頼りになる彼氏だって思ってる」

「それ、俺のパクリじゃないか」

言って、笑う塔夜と遥華だった。

「夕焼けは、いつ見ても綺麗でいいもんだよね」

「ああ、確かにな……」

空を見上げると、雄大な空がこんにちは。

見渡す限り、綺麗な茜色が広がっていく。

「良い空だな——」

呟くように言った塔夜だった。

——明日もこんな感じだろうか。

何事もなく終わる日々。そんな毎日は貴重だった。

いや、幸せだったと言うべきだっただろうか。

／2

今朝はどんよりとした天候だった。

雲に覆われた太陽は何を思っているんだろう。

「おはよー」

「ああ、おはよ」

公園に先に着いていたのは遥華だった。

遥華と待ち合わせとして使っていた公園で挨拶する。

朝一番目、いや二番目……多分、三番目だっただろうか。そうだ、四番目だった。

「親父と会話してないから三番目だった。悪い悪い」

「ん？ 今何か言った？ 塔夜」

「いんや、こっちの話。交差点の出会い頭に猫と鉢合わせしたら少し運命変わったたなって思っ
てさ」

「何言ってるんだか良くわからないんだけど？」

斜め45°に首をかしげた遥華だった。

『飽きた』なんぞ言ったら、どうなるのか楽しみだったけれど、想像に良くないから止めるこ
とにしよう。

「それじゃあ、しゅっぱーっ！」

遥華の一声でこの電車は動き出していた。元気な遥華一号に寄り添うような形で、塔夜2号は
飛び立ちます。

「今日も、一緒に登校か」

「そりゃあ、待ち合わせしてたら同じ時間に顔を合わすことになるのは当たり前だよな」

ついさっきまで止まっていた足は学校へと向いていた。

さて、また変わらない毎日を過ごそう。

「ぶっちゃけ、朝の待ち合わせしてる段階で学校行くの飽きてたんだけどね」

おい、と突っ込みを入れたくなるところを塔夜は静止で答えた。

「学校始まる前から飽きてどうすんだよ？」

そんな塔夜の言葉に、

「学校休んじゃおうっ！」

そんなことをのたまった遥華だった。

「それは難しいんじゃないかな、テスト近いし。それに、これからどっか行こうとしても曇天は
付いてくる。我慢して学校に行ってた方が無難な気がしてるんだけどな」

塔夜の言った言葉は正論ではあった。

しかしながら、そんな正論を望んでいた遥華ではなかったようで、

「整然とそんな言葉述べられても、こっちとしては面白くないんだけどなーっ」

そう遥華がぶーたれる。

「んあー……ぐちぐち言ってないで、学校行こうぜ？」

歩き始めて数分間。

そんな彼女を宥めながら学校へと向かう最中、だった。

「ーん？」

ふと、ある人物が視線に入った。

彼女は一体誰だったかー。

「ーまあ、いいか」

忘れた。

学校までの一本道を突き進んでいく塔夜と遥華。

学校までは徒歩で大体二十分程だった。

「てくてくてくてく。てくてくてくてく」

見慣れた通学路を歩いていく。

「てくてくてくてく。てくてくてくてく」

塔夜に続いて、遥華がのる。

第一段階は無事に突破できた。

問題は次だった。

「かーえーるーのーうーたーがーはいっ」

リズム感が大切だった。

「かーえーるーのーうーたーがー」

よし。

「ぐあっ、ぐあっ、ぐあっ、ぐあっ」

「あれ？ なんか抜かしてない？」

「げげげげげげぐあっぐあっぐあっ」

よし。

「ここに変態がいまーすっ」

遥華にはどうやら荷が重かったらしい。

塔夜は惜し気もなく発揮する。

「かーえーるーのーうーたーがー」

それを何度か繰り返し、学校に到着する。

校門までの道のりはありふれた日常の延長線だった。



待ち合わせはいつもと同じ、明日香と遥華の二人と。

そしてー昼食時にそれは起こった。

いつものように列に並んでいた時だった。

声が聞こえた。

それからは早かった。

『――塔夜っ！ 塔夜っ！ ねえ？ 聞こえるっ？』

誰だろう？ 塔夜を呼ぶ声がした。

静止し、咄嗟に振り返り周りを見渡すが、それらしき人物はいない。

「ん？ どうした？ 塔夜？ 首でもつったか？」

不意に、新谷と目が合う。

不自然に後ろを向いた塔夜に対して、そう疑問を持つのは当然だろう。

「いや、なんでもない」

その人物は、新谷ではなかった。

ならば一体誰が――。

「誰かに呼ばれた気がしたんだけど――」

一人うわ言のように呟いていたが、気のせいだと思い再度止めた足を動かす。

『塔夜っ！ 塔夜っ！』

それは、確かにどこかで聞いた声だった。

酷く懐かしく、まるでここではない遠いどこかで聞いた声、そんな抽象的な言葉でしかその声は表せない。

「やっぱり、聞こえる」

「何がだよ？ お前さっきから変だぞ？」

通路で動いたり、止まったり。塔夜の挙動は明らかにおかしかった。

幻聴を疲労のせいに見てみたが、ここ数ヶ月、塔夜は部活を制限していたため体力は有り余っていた。夜更かしなどの不摂生は当然なく、健康そのものの身体だったにも関わらず、一体なんなのだろう。

『ゴメン、塔夜。話している暇はないの。少し間身体借りるわ』

一方的に『彼女』はそう言うと、塔夜の意識にトリップした。

「――え？」

その言葉を発したのは、確かに、塔夜ではない塔夜だった。

「――ズドン！」

巨大な地響きと同時、一瞬にして食堂内は静寂に包まれる――直後。食堂の中心にどす黒い時空の歪ともでも言えるような、空間の歪んでいる場所が出現した。丁度その場所で昼食を取っていた生徒達は、蟻地獄に迷い込んだが如く漆黒の流砂に飲み込まれていく。

「お、おい。なんだよ、あれっ」

二人分のラーメンセットが台無しになっていたが、それよりも先決する問題があった。

――目の前のアレは、一体何なのだろう？

「……うわあああああああああ」

数秒後、そんな奇声狂声が学食内に轟いていた。

次々にその闇は出現しては生徒達を飲み込んでいく。

学食内は最早、阿鼻叫喚のよう相を呈しており、誰一人として冷静な判断をできそうになかった。

学食の入り口付近には、我先にとこの空間から脱出を試みようとする生徒達が雪崩のように押し寄せていた。

「や、やべえ！ おい、塔夜！ 塔夜達も逃げるぞ！」

理解不能な目の前の光景。

しかし、今はそんなことを考えている暇などなかった。ここでのんびりしてればあの闇に飲み込まれてしまう可能性がある。すぐさま退避しなければならないだろう。新谷に続こうとした一が、塔夜はある事実の不可解に気付いた。

「おいっ！ 塔夜っ！ 何やってんだよっ！ グズグズしてたらお前もあの闇に飲み込まれちゃうぞっ？」

後方、塔夜の背中に向けてコウから激にも似た大声が聞こえてきていた。

しかし、それに返答するために振り返ることもできなかった。

——動かない。

そう、体が全く動かなく、筋肉が言うことを利いてくれないのだ。

「い、いや、違う。動いてないんじゃない、これは——」

「くっ、塔夜！ 先行くぞっ！！！」

グズグズしていた塔夜に新谷はそういう残すと、先を駆けて行ってしまった。

しかし無理もない、この非常事態で立ち止まってる馬鹿にかまってられるはずもないのだから。

「どうしてっ、どうして動かないっ！」

パニックになる頭を必死に冷静にさせ、そこで咄嗟に判断した——他の誰かが塔夜の体に移り、意識的に操作を自粛させるようにしていると。

直後、塔夜の脳に訴えかけてくるもう一つの何かを感じ取っていた。

『はあ、やっとコントロールできたわ。塔夜、落ち着いて聞いてもらえるかしら？ あなたが死んだ時、お爺と契約したことを覚えている？』

一瞬混乱した。

塔夜であるはずなのに、違う思念体が塔夜の意識を操作しているのだ。

口を動かそうとしていないし、声を発そうとしようとしていないはずなのに、塔夜の体は勝手にそんな言葉を発する。

「なんだよ、これ。誰か知らんが、何勝手に俺の身体動かそうとしてんだよ？」

『ゴメンね。でも、今はこんな事を言ってる場合じゃあないの。貴方のことが奴らにばれてしまったの。少し、身体借りるわね』

「——え？」

——転瞬、塔夜の体は雄々と跳躍していた。

正直、自分の体がここまで動くことに物凄く驚いているが、如何せん今の塔夜は『彼女』に意

識を取られつつあった。視界が反転し自分が今どこにいるのかさっぱりわからなくなっていたが、塔夜の体の意識を奪ったもう一人の塔夜にとっては朝飯前のようなようだった。

歪みから身体を守る。幾つもの歪み——渦とも言うべきか。それから身体を開放する。飛び移るその様は蟲の動きに似ていた。

——そして、それは何度目の跳躍を繰り返した後だっただろうか。

『ふう、ようやく終わったわ。塔夜？ 聞こえる？ 塔夜？』

「うあー、気持ち悪いっ」

視界がぐんにやりしてまともに歩けそうになかった。と言うか、まともに歩けるほうが異常だと思う。

『はあ、全く、しっかりしてよね。『プロト』』

彼女は聞きなれない言葉を発していた。しかし、今の塔夜にはさっぱりわからなかった。

でも、薄れゆく意識の中、一つだけ明らかになった事実がある。それは、あの時の契約——もう一人の塔夜と共存すること——が今、正式に交わされたと言う事実だった。

続きはこちらから→<http://ncode.syosetu.com/n9673cs/>